

## 主日礼拝

2023年10月29日(日)

題 「言(ことば)は神の意思」

テキスト: ヨハネによる福音書1章1～14節

皆さま、おはようございます。

教会歴では先週までは聖霊降節臨でしたが、今日からは降誕前となります。

神の子イエスの誕生の時へと少しづつ近づいて行く季節となります。

今日の聖書箇所の小見出しには「言が肉となった」とあります。

これは「受肉」のことで神が人間の形をとることを意味しています。受肉という言葉は、英語でインカーネーションと言われます。

神の言葉としての救い主キリストが、一時的にとということではなく、人間イエスとしてこの地上に現実的に、肉の体で来られたことを意味しており人間の救いにとって重要なことなのです。

共に聖書のことばに心の耳を傾けましょう。

1:初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。

言とは、ギリシア語でロゴスと言われます。「言葉、命、真理、理性」という意味です。そして、2節; この言、キリストは、初めに神と共にあったのです。キリストは救い主メシアです。神が世界を創造された時から神と共にあったのです。キリストは神と同じ本質を持っておられたのです。三位一体ということばがあります。造り主なる神、救い主なるイエス・キリスト。そして慰め主なる聖霊で、神さまは三つの姿でご自身を表されたのです。しかし、この三つの姿はバラバラではなく、その本質においては一つであるということです。

神は愛そのものであり、被造物を生かす善き力なのです。

3:万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。

万物は神によって、神の思いと、意思と計画に基づいて創造されたのです。

そして4:言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。

命は光でもあるのです。被造物が生きることが神のご意思なのです。ですから人が人を殺すことは、神の意思に反すると言わざるを得ません。神はわたしたちに対して「生きよ!」と言われる存在者なのです。人間には、どんな人にも神から与えられた尊厳さがあるのです。それが今日、人権と呼ばれるようになったのです。現在は高齢化社会を迎えて、どのように生きるかに加えて、どの

ように死を向かえるのか、との課題もあります。祈ってそれぞれが考えていかなければならない重要な、大切な課題だと思います。

ところで、今週10月31日はドイツのマルチン・ルターによって始められたとされる宗教改革記念日です。それまではカトリック教会のローマ教皇が発行する免罪符を購入することによって人間は罪から救われるとの教えが強まっている中で、ルターは聖書に基づいて、イエス・キリストを救い主として信じるこそ神の救いに預かる道であることを説いたのです。宗教改革者ルターも、時の国会に呼び出されたことがあります。

時の教会からルターの書いた書物が異端扱いされたのです。つまりルターは間違った考えを持っていると決めつけられます。考えを改め、書いた書物の間違いを認めるように迫られるのです。

ベイントンという人の「我ここに立つ」という書物によればルターは国会での厳しい審問を受け、最後にこう語ったと言われています。「わたしの良心は神のみことばにとわわれているのです。わたしは何も取り消すことはできないし、取り消そうとも思わない。なぜなら、良心にそむくことは正しくないし、安全でもないからです。神よわたしを助けたまえ。アーメン。我ここに立つ、わたしにはこうするよりほかにない。」と。

こうして、教会改革が始まって行ったのです。ルターは当時のカトリック教会からは破門されますが、「神の恩寵と、聖書と信仰のみ」という主張はやめることはなかったのです。命と愛と、希望の源なる神さまへの信仰こそ、信頼こそが、人生の旅路を導く杖なのです。

さて、今日の聖書個所の5節では、

「5:光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」とあります。暗闇は人間を理解できず、捕まえようとする力で、死の力を思わせます。しかし、神からの光は、神の命、言は、神の思い、意思は闇の中でこそ光として輝くのです。

人間も神さまからの光を受けて暗闇の中を生きるのです。生きていけるのです。神が助け、守ってくださるのです。わたしたちが、神と共にある時、闇はわたしたちを捕まえて支配できなのです。闇の中でも神が助け船を出してくださるのです。神の助け、救命ボート、いのち綱は、イエス・キリストです。

歴史の中で神と神の子なる救い主を証しした人がいます。それが洗礼者ヨハネだと言われます。彼は自分の後から来る救い主キリスト・イエスを指し示した人で。キリストのことを人々に言葉と行いで示す働き、1本の指となってキリストを指し示した人でした。

6:神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。

7:彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。

8:彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

9:その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。

ヨハネは、キリストを示すという使命を持って生き抜いた人でした。イエス・キリストを指し示す指としての働き、使命を神から与えられていた人だったのです。

10:言は世にあった。世は言によって成ったが、**世は言を認めなかった。**

11:言は、自分の民のところへ来たが、**民は受け入れなかった。**

ここには、救い主キリストが、この世では認められなかったことが言われています。聖書の福音書に記されたイエスの生涯を見れば分かります。

イエス・キリストは、神の愛を伝えるために来たのに、自分と同じ同族の多くの人から受け入れられず、卑しめられ十字架に至る苦難の生涯を送られたのです。それは、わたしたち人間の罪の深さ、この世の闇の深さを示すと同時に、イエス・キリストの愛の深さを示しているように思えます。主イエス・キリストは、罪びとを救うためにこの世に来た神のロゴスであり、神の光であり、命そのものだったのです。

12:しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。

この「資格」ということばを「得権」と訳している聖書もあります。キリストを信じる人は神との特別の関係に入る。神はその人に、神の子となる資格、特権を与えられるのです。試験もなしで、たとえ能力がなくてもイエス・キリストのゆえに、神の子とされる資格と特権を頂けるのです。

13:この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、イエス・キリストに心つながる者たちは、人間の力ではなく、**神によって生まれたのです。**

血によってではなくとは、血のつながりでなくということです。

肉の欲によってではなくとは、人間の考えや欲望によってではなくということです。

人の欲によってではなくとは、男の意思や欲望によってではない、ということです。日本でも戦国時代など、女性の結婚までは政略結婚などが多かったようです。神の子となる資格とは、そのような者ではないということです。

今日、イエスにある教会の群れの中でも、人の力によって、教会の決まりを作っていく群れ、教会もあるのです。そのような群れは、この世的な力がありま

た声の大きい人たちが、イエスを乗り越えて人の力をむき出しにしていくことがあるのです。形式主義的な群れとなって行きやすいと思います。

ですからイエスにある群れ、教会では、神への祈りが必要不可欠なのだと思います。人間が集まっていますが、主イエスなしに教会ないし、祈りなしに教会はないのです。

12:しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。

ただ神と子なるキリストを信じることによって神の子となる資格が与えられたのです。

14節には「人間となったみ言葉」つまりキリストの受肉のことが宣言されているように受けとめます。

「14:言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」ここで「宿られた」という言葉は、本来「天幕を張った。」ということばから来ていると言われます。これは、かつてイスラエルの民がエジプトで奴隷の身で苦しみの中にあつた時、イスラエルの民に対する憐みの神の導きにより、指導者モーセが立てられ、エジプトから逃げ出し約束の地カナンへと砂漠をさすらいながら旅をしました。その時、砂漠に天幕を張ったことが旧約聖書には記されています。イスラエルの民は、神を信じて、苦難の旅を続け、ついに神の約束の地に入ったのです。

わたしたちも、今日聞いたインカーネーション「受肉」の教えを胸に刻んで神の導きの中で、神とイエス・キリストを信頼しながら与えられた人生の旅路を送って行きたいと願います。